

移動図書館 ふれあい運ぶ

本を積んだ車で地域をめぐる「移動図書館」。戦後の復興期には、地域の隅々に文化を届ける役割を担った。最近では、全国各地で本をきっかりに届けた人々の交流や障害者らへの支援、震災復興などに役立てようという動きが広がっている。



「そらまめMEN」号と、保育園児らに絵本の読み聞かせをする下吹越かおみさん。鹿兒島県指宿市



障害のある子どもたちの自宅を訪れ、絵本を読み聞かせる岡山市立中央図書館の三船充晃さん。岡山市内

障害ある子に読み聞かせ ■ 仮設生活の励みに

「無本村」なくす

鹿兒島県指宿市。池田湖畔の広場に今月7日朝、赤色とクリーム色のツートンカラーのワゴン車が入って来た。ペレリ帽をかぶった女性たちが書棚やイスを設け、絵本を並べていく。ブックカフェ「そらまめMEN」号のオープンだ。

女性たちは、NPO法人「本と人とをつなぐ『そらまめの会』」のメンバー。県内各地で絵本の読み聞かせや読書会を開いてきた。運行を開始した「そらまめMEN」を使い、本を手にする習慣のなかった人々と交流していく考えだ。

車や500冊の絵本、1年分の運営費などは、全国487人からの寄付計約1200万円で賄った。会の理事長の下吹越かおみさん(55)は「本との出会いが力になる。同じような活動をする人が各地に増えて『無本村』がなくなる」といふ。

「そらまめMEN」のように、各地で「交流」を重視した新しい取り組みが始まっている。愛知県田原市図書館は「元氣はいたつ便」として、高齢者施設に本を貸し出す。山形県新庄市では、月1回開かれる屋外のマルシェ(市場)にあわせて車を横付けする。

楽しい体験して

移動図書館を使って、本

1949年に千葉県立図書館が「ひかり号」で個人に貸し出すスタイルの巡回をスタート。GHQ(連合国軍総司令部)の払い下げトラックを改造し、600冊の本を載せ、泊まりがけで県内を巡ったという。活動は各地に広がり、日本図書館協会によると、ピークの97年には全国で計697台が運行していた。その後、図書館の建設が進むにつれて台数は減り、2017年には541台になっている。

を手にしづらい人々を「支援」しようという取り組みもある。岡山市立図書館では司書が毎月、重い障害がある人の家を巡って本を貸し出す。1971年から続け、いまは16家庭が利用する。市内の一軒家を600冊の本を載せて訪問するのは、軽ワゴン車の「おおぞら5号」。心身に重い障害があり、頻繁にたんの吸引が必要な金谷清夏ちゃん(6)に、司書の三船充晃さん(48)が本を届ける。三船さんが絵本の読み聞かせや紙芝居を始めると、清夏ちゃんも嬉し入る。母親の寛子さん(47)は「笑ったり、いままで見せなかった表情を見せてくれたり。あきらめてはいけないですよね」。清夏ちゃんが大きくなるにつれ、図書館から足が遠のいていったという。「おおぞら5号」は清夏ちゃん宅に1時間ほど滞在。三船さんは「在宅で医療ケアを受けて暮らしている子どもたちほど刺激が大事。本を通じて、楽しさを体験してほしい」と語る。

震災後に11万冊

一方、移動図書館が東日本大震災の復興に一役買っている。専門家から注目される事例もある。NGOシヤンティ国際ボランティア会が運営する移動図書館は、東北3県の仮設住宅を巡る。震災が起きた2011年から昨年までの6年間で、のべ5万5千人余りが計11万8千冊を借りた。シヤンティの広報担当者によると、利用者から「ここに来れば他の人との話ができて」「移動図書館が来る日を、楽しみと思える気持ち」が再び持てるよう

になった」などの声が寄せられる。本をきっかりに届けた人が会話を交わし、移動図書館が住民の交流の場として位置づけられるようになってきたという。図書館の歴史に詳しい十文字学園女子大学の石川敏史准教授(図書館学)は「東日本大震災をきっかけに、移動図書館の役割が再び評価されるようになってきている」と指摘する。「地域には、高齢者や障害者ら社会的な孤立を深める人たちがいる。人口減少社会を迎える中、移動図書館には地域の人とのつながりを作ったり市民を育んだりする可能性がある」(上田真由美)